
旋律を奏でて

侑真

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

旋律を奏でて

【Nコード】

N9733E

【作者名】

侑真

【あらすじ】

宏紀はいつも昼休みに一人で居なくなる荒井の行き先が気になっていた。普段から人を寄せ付けない荒井と話すこともできないまま生活を送っていたある日、ふとしたことで彼の行き先を知ることになり……

第一章 〈curiosity〉

4時間目終了のチャイムが校内に響いた。起立、礼を形ばかりにすれば、生徒達は弁当を片手に思い思いに移動する。

僕、^{やまなかひろき}山中宏紀もいつも通り鞆から弁当を取り出して、教室の後方の片隅に集まっている男子の輪に加わった。

椅子に座りながら、視線を窓際に移す。

チラリと荒井^{あらいゆつと}勇人を盗み見ると、彼はいつものように片手に鞆を持ちながら、そそくさと教室を抜け出していくところだった。

この春、高校2年に学年が上がり、僕と荒井は同じクラスになった。しかし、もうまる3ヶ月経つというのに、僕は彼と一回も話したことが無い。

荒井は背が高く、顔も整っている。少しクセのある黒髪は男にしてはちょっと長いが、彼の持つワイルドな雰囲気にとてもよく似合う。いつも一人で無表情のまま机に向っているうえに、他人から話しかけられても大して返事もしなければ、表情も崩さない。言ってしまうは無愛想なのだ。

そして、荒井は毎日4時間目が終わるとどこかへ消える。クラスメイトとの関わりはゼロに等しい。影で騒いでいる女子は結構居るようだけど、彼自身は気付いていないようだった。

そういうわけで、荒井がなんとなくクラスから孤立するまでに時間がかからなかった。

そんな彼を盗み見ることが、いつの間にか僕の習慣になっていた。一体、どこにいくのだろうか。

「今日何して遊ぶ？」

ふいに左から声がした。視線を声の方に向けると西村だった。もぐもぐとご飯を口の中いっぱいにほお張りながら、首を傾げている。そうだなあ　　といいながら、僕は弁当箱を開いた。

「何でも良いけど、できれば」

「室内で、でしょ？」

分かってるよ、と言つかのように結城が僕の言葉を奪った。結城と西村はいつもつるんでいる友達だ。

「宏紀は色白だからなあ。日焼けすると真っ赤になっちゃって大変だもんな。」

茶化すように西村が言った。

「すみませんねえ……、軟弱で。」

僕は少しムツとして、西村をにらみつけた。

「軟弱だなんて思ってたねえよ？だってお前、見かけによらず剣道強いじゃん。」

ヘラヘラと笑いながら西村がフロアにもなっていない言葉を吐いた。

見かけによらずってなんだよ！！

内心面白くないながらも、実際その通りなのだから仕方が無い。母親譲りの色白で全体的に色素が薄い。そのうえ体格もあまりヨロシクナイものだから、やれ軟弱だの、やれ貧弱だのと散々言われ続けてきた。

「まあ、昨日は雨降ってグラウンドぐちゃぐちゃだもんね。体育館の方が無難でしょ。」

ね？と、結城が同意を求めるように僕の方に顔を向けて微笑んだ。結城はさり気無く気遣いの出来る良いヤツだ。西村にも見習って欲しいものだ。

「そうだな。最近雨多いもんな。」

梅雨なんか早く終わればいいのに、と西村は窓に眼を向けながらポツリといった。

夏が来たら来たで、炎天下よ早く去れ！と思うのだが、このじめじめした空気はあまり好きではない。じつとりとシャツが肌にへばりつく感じがどうも苦手だ。

さっさと昼食を食べ終わると、僕達は体育館へ向った。

「今日はバスケだよな！」

「え、これ以上汗かくの!？」

やだよ、と僕が文句をたれていたとき、ふと荒井らしき人物が視界に入った。

本館から体育館に続くこの渡り廊下はガラス張りで、校舎の中間あたりの3階にある。だから、ここからは他の階の教室の中が見えることもあるのだ。

僕の視界に入った荒井であろう人物は、同じ階の3階にいた。

見かけた窓のある教室は、一体なんの部屋だっただろう……。

僕の好奇心が頭をもたげ始めてしまった。

気になる。すっごく気になる。

どこにいるのか全く分からないならここまでの興味は持たないが、あと一歩で分かる位置にきているのだ。気にならないわけがない。

「宏紀、なにしてんだよ。ぼーっとつたってんなよな。」

「あ、ごめん！僕、ちょっとトイレ！」

言うが早いか僕はもう彼らに背を向けていた。そっちにトイレは無いぞーという西村の声を背中で聞きながら、僕は全速力で走った。来た道を戻り角を曲がる。そのまま一直線に駆け抜け、目当ての教室の前に来た。

「ここだ……。」

肩で息をしながら、頭の中で計算をする。あの位置から見えるのは、ここの教室のはず。しかし、僕はどうしても信じられなかった。

だって、この教室、音楽室なんだ。

第二章 〈surprise〉（前書き）

荒井の行き先が気になっていた宏紀は、
その場所を突き止めるチャンスを手にした。

彼の行き先は意外な場所だった。

第二章　　＼ surprise ！

何で音楽室？

疑問を抱きながらもそのドアノブに手をかけた。防音の整ったその教室の扉は重く、開けると中から涼しい風が吹いてきた。

と、同時に音が聞こえる。

ピアノだ。

僕はある種の期待を胸に抱きながら、音を立てないよう慎重に中に入り扉を閉めた。幸い弾き手はまだ気付いていない。

緊張してるのだろう。自分の心臓の音が分かる。

扉の位置からだと言えないうえ、僕は弾き手の顔が見える位置まで身を低くして移動した。

やっぱり荒井だ。

荒井は力強くも、どこかもの悲しげな、そんな音を奏でていた。

彼の指が器用に走る。

普段の姿からは想像できないほどの激しい音。切ない音。そしてどこか孤独な音。

今弾いてる曲は聞いたことがないけど、僕は一瞬でそれを覚えた。それくらい強烈だった。

冷房の効いた部屋の中で、縮こまりながら荒井の音を聞いていた。汗を吸ったシャツが少し冷たい。

荒井の演奏が終わる、と同時に僕はやらかした。

「へくしゅっ！」

「！？」

ガタン、と音を立てて荒井は立ち上がり僕を確認した。眉間にしわがより、明らかに不機嫌だ。その眼に射抜かれて、僕は一歩後ず

さった。

「……いつから？」

「え、つと、2・3分くらい前…かな？」

「ごめん、サバよんだ。本当はもっというと思う。」

「なんでここに？」

当然の質問だ。音楽室なんて滅多に人が来ない。

まさか、荒井を追ってきました、なんて言えるはずもなく、僕は苦し紛れに「冷房を少々……」と答えた。

その答えにため息をつきながら、彼はピアノに向き直った。何事も無かったかのようにまた弾き始める。どうやら居てもいいらしい。出て行けと言われなかったことが嬉しくて、僕は少し荒井に近い席に座ってみた。

ちよつとだけ精神的に近づけた感じ。きっと誰もこんな彼の姿を知らないんだろうなあと思うと、なんだか優越感。

僕は音楽のことなんて全く分からないけど、それでも荒井が上手いことは分かった。

大きい身体で繊細な音を奏でるその姿は、ミスマッチのような気もするけど、なぜか僕を安心させた。

次々と弾かれる曲の中でやつと僕も知ってる曲が流れた。曲名は知らないけど、CMとかでも使われるようなちよつとポップなやつ。軽くリズムを足で刻んで、鼻歌を歌ってみた。自然と身体が揺れる。楽しくてふわふわした感覚。

ふと視線を感じて荒井のほうを見ると、視線が交わった。

そして彼は、柔らかに笑った。

本当に柔らかく。

一瞬、僕は何が起きたのか分からなくなった。

荒井が笑った？

僕の心臓はさっきの比じゃないくらいドキドキし、結局その曲の後半は全然耳に入ってこなかったんだ。

第二章 〈surprise〉（後書き）

今回は短くなりましたが、大事な部分が書けました。
次回はもう少し進展が欲しいです…。

ここまでお読みくださって有難うございます。
ご意見・ご感想など頂けますと、嬉しいです。

第三楽章 ｝ c o m i n g c l o s e ｝（前書き）

荒井の行き先は音楽室だった。

宏紀は荒井の音・姿に衝撃を受ける。

第三楽章　　coming close

あの音楽室での一件以来、僕はますます荒井を意識するようになってしまった。

授業中もいつの間にか視線を向けているし、放課後も彼の行き先に思いを馳せた。

またあのピアノが聞きたい。あの姿を見たい。

その思いは日に日に強くなる一方だった。

そして一週間経ち、とうとう僕は行動に出る決意を固めた。

「荒井！」

今日もいつものように教室から出て行こうとする荒井を、僕は決死の覚悟で呼び止めた。

「あ、あの、あのさ。」

声が上がらず。手は汗まみれだ。

こちらを振り向いた荒井は、かすかに首を傾けた。

「きよ、今日、行っても良いかな？」

「……」

沈黙。

やっぱりダメか、と肩を落としていると荒井が口を開いた。

「昼飯食べてから来い。」

僕は大きく2・3度首肯し、声を弾ませて言った。

「うん、ささつと食べてすぐ行くから！」

荒井は少し驚いた顔をし、舞い上がっている僕を見て苦笑したようだった。

また後で、と挨拶を交わして、弁当を食べるために西村と結城のところまで行った。

「なあにニヤついてんだよ？」

僕がお弁当を持って近寄ると、西村が声をかけてきた。

「へへへー、ないしょー。」

弁当の蓋を開けると、珍しく手作りだった。今日は良い日かもしれない。

「荒井と話してたよね？」

「ん？まあね。」

よく見てるなあ、と思いながらも結城の質問を受け流す。

「仲良かったの？お前ら。」

なにやら質問攻めだ。僕は仲が良いってほどじゃない、と言いなからご飯を掻き込んだ。

さつさと食べて音楽室に行くんだから。

もしかしたらと食べる僕を見て、二人は首をかしげた。

「内緒なの？アヤシーなあ。」

薄く笑いを浮かべて、言いたくないなら良いけどさ、と繋げながら結城はパンをかじる。

「アヤシーって、おい。」

そんなことはないと言解をし、おかずに手を伸ばしたが、二人はまだ何か言いたそうだ。

だって仕方ないじゃないか。言って良いことなのか分からないし、荒井の許可も取ってないし。

胸のうちに言い訳じみたことを並べても意味はないし、本音はそこじゃないことは既に分かった。

ただ単に、二人だけの秘密みたいで、それを壊したくなかったんだ。

「で、今日は荒井と昼休みを過ごすの？」

西村が嫌な言い回しをする。なんだか心のうちを読まれてるみたいで落ち着かない。

「うん、今日は、ね。」

言いながら、食べたお弁当箱を片付ける。

片付けている僕を見て、少し落ち着けば？と西村が笑った。

そんなに浮き足立ってるのかとちょっと恥ずかしくなりながら、僕は二人とわかれ音楽室へ向った。

音楽室のドアノブに手をかける。前よりも緊張してるみたいだ。相変わらず重たい扉を押し開くと、今日もよく冷房が効いていた。荒井の邪魔をしないようにと静かに入ったつもりだったのに、曲が止まってしまった。

「ごめん、お邪魔します。」

荒井が僕を見て、軽くうなずいた。そしてまた指は鍵盤の上を躍りだす。

一週間ぶりの荒井の音はやっぱり素敵で、僕の心を静かにさせる。僕はこの前と同じ席に座って彼の弾く姿を見ていた。

どうしてか、ピアノなんて女子が弾くものだ、という変な偏見が僕にはあった。

でも、荒井のその姿はそんな偏見を一瞬にして吹き飛ばす。性別とか、体格とかそんなものは関係なくて、大事なのは好きなものに真摯に向き合ってるかどうかなんだな、って思える。

ちょうど僕の剣道のようなもの。

小さくても筋肉の付きが悪くても、剣道が好きだって言う気持ちと努力があれば、しっかり上達できるのだ。

僕が荒井の音楽に惹かれたのは、こういうことも原因の一つなのかもしれない。

三曲ほど弾き終わると、荒井はこちらを見た。やっぱり邪魔だったかな、と不安になる。

「退屈じゃないのか？」

思いがけない質問に僕はドギマギした。そして首を思いつきり振って否定する。

「そんなことないよ！聞いているだけでいいんだ。」

パタパタと手を顔の前で振る僕を見て、そうかと呟くと、彼は何かを思案してるような顔つきになった。

そしておもむろに口を開く。

「弾いて欲しいものはあるか？」

「え！？いいの？」

彼の予期せぬ質問に僕は立ち上がりかけた。衝撃だ。

でも、僕は音楽には疎くて、ピアノの曲なんてよく分からない。

しかしここで、やっぱりいいですなんて勿体無くて言えるわけがなかった。

どうしようかと逡巡して結局デイズニーの曲にした。悲しいかな、僕の貧相な頭ではこれが精一杯。

荒井は一瞬、嫌そうな顔をしたような気がしたけど、それでも弾いてくれた。

たまに間違えながら。

あれ？って顔をしてる荒井を見てるのが楽しくて、僕はあれやこれやと次々に弾いてもらった。

予鈴がなるまでの間、荒井は僕に振り回され続け、チャイムを聞いてホッとした顔をした。

音楽室の鍵を掛け、職員室に鍵を戻す。そして教室に続く階段を上っているとき、荒井が口を開いた。

「毎日あそこにいるから。」

暇なときは来い、と。

思わぬ言葉に僕は、立ち止まってしまった。

階段を上っていた荒井が、僕が立ち止まったことに気付いて振り返る。

視線が交差する。

「行くぞ。」

そう言つて、荒井は僕の頭にポンと手を置いた。

大きな手。この手であんな綺麗な音を奏でるのか。

僕の頭から離れたその手を、僕は名残惜しい気持ちで見つめていた。

第三楽章 ｝ c o m i n g c l o s e ｝（後書き）

どうでしょう…少しは近づけたかと思えます。

一楽章つつ距離を近づけていきたいです。

ここまでお読みくださりありがとうございます。

ご意見・ご感想など頂けますと、嬉しいです。

第四楽章 〈unexpected〉（前書き）

音楽室に来て良かった、許可してくれた荒井。

彼の存在はますます宏紀の中で大きくなっていく。

第四章　　unexpected

それからというもの、僕は暇を見つけては音楽室に通うようになった。

会話も比例するように増え、彼はだんだんと自分の話もするようになった。

親・兄弟の話、中学時代の話、音楽の話。

他愛のない話ばかりだけど、僕は荒井と話せることが嬉しくて仕方なかった。

でも、たまに見せる笑顔はやっぱり僕の心臓に悪いようで、毎度ドキドキしてしまう。

これには当然慣れそうもない。

荒井は放課後も音楽室に通っているらしい。

僕が部活で外周を走っていると、窓を少し開けているのだろうか、音が微かに聞こえてくる。

走りながらも、その音が聞こえてくると嬉しいような安心するような気持ちになる。

ほぼ毎日ある剣道部の練習は、体力作りも多く結構きついけれど、ピアノの音に背中を押されるようにして僕は足を進めていた。

七月も半ばになったある日、部の練習も終わり、滝のように流れる汗を手ぬぐいで拭いていると、体育館の入り口に荒井を見つけた。

「え、荒井？」

僕の声で部員達の視線を受ける荒井。にわかに体育館内がざわめく。

荒井はそんな部員達の視線など気にも留めない様子だ。僕は、平然と腕を組み壁にもたれかかる荒井に駆け寄った。

「どうしたの？あ、ゴメン、汗臭いよね。」

2・3歩後ずさると、荒井が僕の手首を掴んだ。

「いや、平気だ。」

こんなに防具臭いの??

いえ、僕が平気じゃないです。と言いたいのだが、手首に神経が集中してしまい上手く口が回らない。

硬直する僕には気付かず、荒井はそのまま続ける。

「あとの位で終わる?」

「え、っと、シャワー浴びたいから、あと15分くらいかな。」

「じゃあ校門で待つてる。」

それだけ言々と荒井はスタスタとその場を離れてしまった。

呆然とする僕に、部員からのしつこい質問攻めが待っていたことは言つまでもない。

部員達を撒いて僕が校門に着くと、荒井が言葉通りそこで待っていた。

「ごめん、遅れた。」

僕は駆け寄って、ぺこりと頭を下げた。その頭を大きな手がポンポンと叩く。

この行為にも慣れない僕は、赤くなつた顔を見られないように少し俯いて話す。

「帰ろう。」

僕の変化に気付いていない様子の荒井は、駅までの道を歩いていく。

こうして一緒に帰るのは初めてのことだった。

並んで歩く道は、いつもと同じなのにどこか違う。

二つの影が西日に照らされて伸びていく。

横目でチラリと荒井を盗み見ると、彼は前をまっすぐ見つめていた。

端正な顔が夕日に照らされて、まるで絵のようだ。

視線に気付いた荒井が、こっちを見る。と同時に僕は目を逸らし

てしまった。

何だか恥ずかしかったんだ。

隣で首を傾げるような気配がした。

「…山中。」

ふいに名前を呼ばれ、僕は彼の顔を見た。

「これから家に来ないか？」

「え？」

僕は目を白黒させた。だって急すぎるじゃないか。

「無理か？」

「無理…じゃない…。」

でも、なんで急に？

「じゃあ、行こうか。」

僕の疑問はお構いなしに、荒井は改札をくぐる。

僕は慌ててその後を追った。

正直、荒井が家に呼んでくれることはとても嬉しかった。

彼が心を開いてくれている証拠だからだ。

でも言葉少なな荒井の目的がどうしても分からない。

僕は期待と不安のジレンマの中、荒井の家へと向う電車に揺られていた。

第四楽章 〈unexpected〉（後書き）

ここまでお付き合い頂き、有難うございます。

音楽室から舞台を変えていこうと思います。

そろそろ宏紀に「荒井が好きだ」とか言わせたいんですが…
まだいえそうもありません…。

ご意見・ご感想頂けたら嬉しいです。

第五楽章 〈 kindness 〉（前書き）

部活帰り、荒井に誘われて帰り道を二人で歩いていた宏紀。

「家に来ないか。」という荒井の唐突な誘いを、戸惑いながらも承諾したが……。

第五章 〈kindness〉

普段とは逆方向の電車に揺られること約二十分。

学生の帰宅時間にかぶってしまったため、車内はやや混雑気味だ。荒井は腕を組み、窓から外を眺めている。西日がまぶしい。

僕はそんな荒井を見ながら、これから起こり得ることの可能な限りを考えた。

考えに考え、でも僕の貧相な頭では、それらしいものが浮かばない。

夕飯にご招待？ いやいや、まさかそんなことは……。

そんな考えが頭の中をぐるぐるしている。

あーでもないこーでもない。僕が悶々としていると、荒井がこちらを見た。

「次、降りるぞ。」

僕が頷いたのを確認すると、荒井はまた窓へ視線をやった。

僕は余計に緊張してきて、掌が汗ばむのを感じた。

プラットホームが見えてくる。

電車の動きがゆっくりになる。

動きが止まり、開いたドアへ荒井が進む。

僕は置いていかれないように、彼の後を追った。

普段降りることのない駅は新鮮で、僕はキョロキョロと辺りを見回した。

自分の家の最寄り駅よりも拓けてるそこは、バスのロータリーや、ショッピングモール、ファストフード店など様々なものがあつた。

落ち着きのない僕を見て、荒井は少し笑ったようだった。

僕は恥ずかしくなり、荒井の視界から外れるように、彼の少し後ろからついていく。

「人、多いから気をつけて。」

荒井が後ろを振り返りながら言う。

「うん、大丈夫。」

ありがとうと付け加えて、僕は暗くなりかけている道を進んだ。駅から十分くらい歩いただろうか。

ようやく荒井の家に付いた頃には、日はもう暮れてしまっていた。真っ白な壁に、オレンジの暖かそうなランプが灯っている。

何だか絵画の世界みたいだ。

「どうぞ。」

荒井がドアを開け、招き入れてくれた。

「お邪魔します……。」

恐る恐る足を踏み入れる。なんだか緊張する。

広めの玄関に靴を置き、出されたスリッパに履き替えると、荒井の後を追う階段を上った。

洋風の荒井の家は、とても綺麗で、絵画や花が置かれている。

これだけで既に僕の家とは大違いなのに、階段を上って僕はさらに驚いた。

「ピアノだ！」

大きな部屋にピアノが一台置いてある。しかもその部屋は防音らしい。

「こんな部屋で毎日弾いてたら上手くもなるよね。」

感嘆混じりに呟くと、隣で荒井が肩をすくめた。

部屋には沢山の戸棚があり、中には様々な本が入っていた。

どれもこれも音楽にまつわるものだった。

僕が珍しそうに戸棚を見ていると、荒井が手招きをし、戸棚の中を見るように勧めてきた。僕は彼の隣に寄り、その中を見てみた。

「あ！」

思わず声を発した。

その中には沢山のデイズ二ーの楽譜があったのだ。

以前、僕が弾いてくれと頼んだことを覚えていてくれたらしい。

「ここに有るのは全部練習した。」

「ほんとに!？」

あの時、弾けなかったものも有り、彼が新たに楽譜を揃えてくれたのは一目瞭然だった。

荒井の気持ち嬉しくて、僕は彼に“ありがとう”を浴びせるように連呼した。

そんな僕を見て初めは目を丸くした荒井だったが、ずっと目を細めて笑った。

「良かった、連れてきた甲斐があった。」

そしてまた、頭にポンポン。

僕の顔は、嬉しいやら恥ずかしいやらで真っ赤になっていただろう。

目を細めて微笑した荒井は、袖を捲り上げてピアノへ向きあった。おもむろに指を動かす荒井。音が跳ね踊る。楽しい音楽が彼の指によって作られていく。

どうやら、荒井はこれを聴かせるために僕を連れてきたようだ。キラキラ光る音の中、僕のために弾かれるそれをこそばゆい思いで聴いていた。

一曲弾き終わると荒井が手を差し伸べてきた。そして手招きをする。

何を要求されているのか分からず、とりあえず近くに寄ってみた。

荒井がまた手を差し出したのにつられて、僕はその手を握った。

「……!」

途端に荒井が僕から視線を外して、くつくつと笑い始めた。

「な、なんで?僕、何か間違えた!？」

不安と恥ずかしさでオロオロと狼狽える。変な汗まで出てきた。

「ただ俺は……。」

荒井は目にうつすらと涙を浮かべながら、笑いを噛み殺している。「好きな楽譜を寄越せて……。」

楽譜？そういうことだったの！？

恥ずかしい恥ずかしい恥ずかしい！！

「ま、間違えた。」

この部屋のどこかに穴は有りませんか？

僕はその場でうんうん唸りながら、頭を抱えて座り込んだ。

「山中……、お前って天然？」

ようやく笑い終わった荒井が僕の顔を覗き見る。

わりとしつかりしてるのかと思ってたのにな、なんて言いながら僕の頭を撫でる。

なんだかますます恥ずかしくなってきた。本気で穴を掘りたい気分。

でも、あんな風に笑ってる荒井ってなかなか見る機会がないから、ちよつと得したかも。

と思わないと救われない。

その後、思い出し笑いをする荒井に、僕は文句を垂れたのだった。荒井がちゃんと喋れば良かったんだろ！
って。

第五楽章 〈kindness〉（後書き）

ご覧頂き有難うございました。

更新遅くなりました。

すみません！

色々書きたかったのですが、上手くまとまらないので今回はここまでにしておきました。

第五楽章は、荒井のママさやら、宏紀のポケっぷりやらを書きたかったので、こんな形になりました。

作者自己紹介の欄に更新情報など載せておりますので、宜しければそちらもご覧ください。

ご意見・ご感想など頂けますと嬉しいです。
第六楽章もよろしく願います。

第六章 く happening (前書き)

荒井の家に行った宏紀。

彼は宏紀のために、楽譜を集めてくれたようだった。

第六章　　h a p p e n i n g

「で？何？結局付き合ってたんの、お前ら。」

昼休み。今日は西村と結城と一緒に昼食をとっていた。

教室の後方で、聞き捨てならない言葉が吐かれる。

「ゴフツ！！」

西村の突拍子もない質問に、僕は飲んでいた麦茶を盛大に噴き出した。

慌てて荒井が教室に居ないかを確認をする。

汚いの何のと文句を言われるが、そんなことは関係ない。

「何言ってるの？！そんなわけないでしょ。」

口元を拭いながら僕は答える。

「宏紀、顔真っ赤。」

慌てて両手で頬を隠す。西村が余計なこと言うのが悪いんだろ！

「だってわざわざ家にまで招待されたわけだろ？しかも楽譜がどうのとかいう理由で。」

「そうだね、音楽室でも済む話だよな。」

惚気にしか聞こえないんですけど、と続ける結城。

西村と結城は僕と荒井の関係を前々から疑っていたようだ。

「あれは、楽譜をたくさん持つてくるのは大変だから呼んだんだって荒井が言ってた！」

ムキになって返すと、二人から意味深長な目線を送られた。

昨日、初めて荒井の家にいった僕は、恥ずかしい間違いをし、「天然」のレッテルを貼られたのだ。

そのことをついさっき、この友人二人に話したところ、このような事態に発展した。

もちろん、荒井がピアノを弾くことを話してもいいと、彼から許

可は取つてある。

「それに、男同士なんだから、そんなの有り得ないよ……って、な、なんだよ……。」

二人の視線に居心地の悪さを感じ、少し後ずさる。

「まあ、別に俺は男同士だからって否定する気は無いからさ。話す気になつたら話せよ。」

西村が勝手なことを言いながら、パンをほお張る。

だからそんなじゃないんだってば……。

僕の言葉は彼らには届いていない様子だ。

「付き合つてるのどうのは置いといて……、実際、荒井の雰囲気、柔らかくなつたよね。」

「そうなの？」

確かに、僕にはよく笑いかけるようになってきたけど。

客観的に見る余裕がないため、僕にはその変化はよく分からない。

「ああ、絶対そう。お前の影響受けてるんだろうな。」

僕が荒井に少なからず影響を与えているらしい。何だか嬉しいような恥ずかしいような、変な気分だ。

僕は、荒井は絶対に損をしていると思うんだ。

もともとカツコイイから、笑うとますます素敵になる。

あんなにピアノが上手に弾けるんだから、もっとみんなの前で弾けばいいと思う。

もっともっと、そういう面を出していけば、あの近寄りがたいイメージなんてどこかにいつてしまうはずだ。

そうしたら、多少口下手だってクラスの輪に入れると思う。

そうなったら良いのに、と思う反面で、やっぱり二人の秘密めいたものが壊れるのは嫌だと思う自分も居る。

嫌なジレンマ。

心の中で呟いた。

自分がいかに心の狭い人間かって分かるようだ。

僕は二人にばれないように、小さくため息を吐いた。

「おい、山中。」

クラスメートの一人が、僕の名前を呼んだ。

弁当を片付けかけていた手を止め、声の方に目を移す。

教室のドアに他クラスの女子が来ていた。どうやら彼女が僕を呼んだらしい。

女の子からの呼び出しなんて珍しいため、僕は少し期待してしまっただ。

「なにになに、お呼び出し？」

茶化す西村の背中を軽く一発叩き、腰を上げた。

僕を呼び出した女の子は、わりと小柄でかわいく、真っ黒の髪の上品そうな子だった。

クラスメートの視線が気になったので、とりあえず場所を移し、人気の少ないところに来た。

「どうしたの？」

と、僕。

彼女はなんだか言いづらそうにしている。

「……あの、山中君って荒井君と仲良いよね？」

「荒井？うん、仲良いかな。」

何で荒井の話が出てくるんだろう、と思っていると彼女がついと手紙を差し出した。

「これ、渡してもらえないかしら。」

差し出された手紙を受け取ると、そこには、荒井君へ、と書かれていた。

彼女は僕に、荒井との橋渡しになって欲しいようだ。

「でも、これ……。」

「よろしくね！」

そういうと彼女は走り去っていった。

こういうのって本人に渡せばいいんじゃない……。

僕の思いは無視されたようだ。

それに何だか、これを荒井に渡したくないっていう気持ちが有る

んだ。

もしこれがきっかけで、荒井とあの子が付き合いだしたら……？

あの子は可愛くて、荒井と並んだらきっとお似合いだろう。そして荒井の笑顔は彼女に向けられるんだ。その時僕はどうすればいいんだろう。

「なんなんだろう、この気持ち……。」

僕は解せない気持ちを抱えながら、呆然とその手紙を眺めていた。

第六章　｛happening｝（後書き）

ここまでご覧頂き有難うございました。

ここで、一発波乱を…と思ひまして、女の子投入してみました。
これで一気に進めることが出来たら良いのですが…
私自身、どう動いていくか明確ではないので。笑

次回もよろしく願ひいたします。

ご意見・ご感想など頂けますと、うれしいです。

第七楽章　く a w a r e n e s s く（前書き）

荒井に手紙を渡して欲しいと頼まれた宏紀。
断ることもできず、受け取ってしまうが……。

第七章 〈awareness〉

手にした手紙に頭を悩ませながら、僕は数学の授業を受けていた。荒井が女子に人気があるのは知っていたけど、まさかこんな役目を自分がすることになるとは、思ってもみなかった。

ただでさえ苦手な数学なのに、授業もまともに聞ける状態ではない。

家に帰ったら自力でやるしかなさそうだ。

手紙のこともあるし、悩みの種は増える一方だ。

「ああ！もう！」

机に頭をつけ、両手で頭を抱える。

「わけわかんないよ……。」

「なんだ、山中。分からないのか？」

自分でも気付かないうちに口に出していたらしい。

先生に言われて、僕は慌てて顔を上げ、首を振った。

クラスメートもちちらを見て、面白そうにしている。

クラスに笑い声が溢れた。

恥ずかしくなって縮こまると、こちらを見ていた荒井と目が合い、

クスリと笑われた。

今日は最悪だ……。

机に伏して荒井の横顔を盗み見ながら小さくため息をついた。

僕は、長い長い数学の時間を、手紙とにらめっこをしながら過ごしたのだった。

放課後、今日もいつも通り部活に向かう。

手紙はまだ、僕の手元にある。

渡すチャンスがなかったわけではないけれど、どうしてもその話題を出すことができてなくて。

気付いたら放課後だったのだ。

どうしよう。

胸の辺りにつつかえを感じる。

心の中にもやもやとした黒い塊が巣食っているようだ。

鞆と道着が入っている袋を手に渡り廊下を歩いていると、以前と同じように荒井の姿を見つけた。

音楽室の窓から見える彼の姿。

ここで彼を見たのが始まりだった。

彼の暖かい音色。

大きな手。

優しい笑顔。

思い出たちはキラキラ輝いている。

なぜか切ない思いが込み上げて、僕は逃げるように渡り廊下を後にした。

制服を脱いで道着に着替える。

ストレッチをして、メニュー通りにランニングから始めた。

校舎の周りをぐるりと走る間も、僕の頭の中はあの手紙のことでいっぱいだった。

渡してくれと頼まれて、半ば強引に渡されたとはいえ引き受けてしまったのだから、渡さないわけにはいかないことくらい分かっているんだけど。

どうしても心が言うことを聞かない。

手紙を渡すだけなのに、なんでこんなに嫌なんだろう。

妙な苛立ちを払うかのように、僕は足を動かした。

風を切って突き進む。

呼吸の音が聞こえる。

無我夢中で走った。

何かに追われているかのように。

その中に微かに聞き覚えのある音。

荒井のピアノ。

『お前ら付き合ってたんの？』

ふいに、西村の言葉がフラッシュバックした。
動かしていた足が遅くなる。

あれ？

両足が地面についた。

僕、もしかして……。

心臓の音だけが聞こえた。

第七章 ｛awareness｝（後書き）

ご覧頂き有難うございました。

今回は「自覚」をテーマに書きました。

自分の気持ちに気付いた宏紀は、手紙をどうするのか。
次回ではその辺に触れて書きたいと思います。

ご意見・ご感想頂けますと、うれしいです。

第八楽章 〈impossible〉（前書き）

女の子から荒井宛の手紙を託されたことで、荒井に対する気持ちを自覚した宏紀。

この手紙をどうしたらいいのか、ジレンマに苛まれる。

第八楽章 〈impossible〉

荒井が好き。

そのことに気付くと、今まで不可思議だった自分の感情全てに説明がついた。

彼と秘密を共有したいこと。

頭を撫でられて嬉しくなること。

手紙を渡すことへの苛立ち。

「僕は、荒井が、好き……。」

男同士なのに？

真っ暗闇に放り投げられた感覚に陥った。

足に力が入らない。

頭の中が混乱し、呼吸が乱れる。

立っているのがしんどくて、その場に膝をついた。

後ろから部員の足音が聞こえてくる。

立たないと、走らないとと自分を叱咤するが、身体が言うことを聞いてくれない。

誰かが僕を呼んでいる声が聞こえた。

「おい！山中？どうした！」

軽く肩を揺すられる。部長だった。

「……すいません。」

大丈夫ですから、と足に力を入れようとして失敗した。

「おいおい、大丈夫か？」

今日は帰ったほうがいいな、と言いながら部長が肩を貸してくれた。

部長にもたれながらすみませんと呟くと、部長は気にするなと言ったように、僕の背中を軽く叩いた。

僕って弱い。

自己嫌悪に陥りながら道着を脱ぎ捨てる。

はあ、と大きなため息を一つ吐いて、ワイシャツに腕を通した。ボタンを留めながら考える。

荒井への気持ちに気付いてしまった以上、この手紙は渡さなければならぬ。

渡さなかったら変に思われる。やきもちを妬いたのがばれてしまう。

でも、渡したくない。でも、渡さなきゃ。でも、渡したくない。どうしようもないジレンマに押しつぶされそうだ。

僕もこの子のように、女の子だったら……。

考えても仕方のないことだけど。

視界が霞む。頬を暖かいものがつつた。

掌で無造作に擦りあげ、僕は決心した。荒井に手紙を届けようと。鞆を掴み、決心の鈍らないうちにと足を速める。

油断したら涙が溢れてきそうで、僕は唇を噛み締めた。

僕は男だから。

この恋に蓋をしなければ。

音楽室に続く階段がやけに長く感じた。

渡り廊下を走る。窓に荒井の姿が有った。

胸がキリキリと痛む。それに気付かないフリをして、僕は前を見た。

音楽室の扉。その向こうに荒井がいる。

手をドアノブに掛けて、瞼を落とす。深呼吸を一つ。全身の力を抜いた。

意を決して右手に力を入れる。

扉を押し開け、足を踏み入れると、そこには普段と変わらない荒井の音があった。

「山中？」

僕の姿を見つめ、荒井の手が止まった。

部活はどうしたのかと問われ、僕は言葉を濁した。

彼への想いの後ろめたさからか、荒井の目をまともに見ることが

できない。

そんな僕の態度を不信に思ったようで、荒井がこちらに近づいてくる。

「どうしたんだ。何か有ったのか？」

手紙、渡さなきゃ。

僕は鞆を乱暴に机の上に置き、その中を漁り始めた。

荒井は驚いた様子で呆然と僕を眺めていた。

手紙を見つけ、それを掴む。

心の中にはいまだにジレンマが巣食っているが、僕はそれを無視して手紙を取り出した。

「これ。頼まれた。」

それだけ言い、荒井の胸に手紙を押しつける。

荒井が僕の手から手紙を取ったのを見て、またチクリと胸が痛んだ。

「……頼まれた？」

コクリと頷く。

「……そうか。」

荒井が呟いた。その声が、何かいつもと違った響きを持っていたので、僕は思わず顔を上げた。

そこには荒井の複雑な顔があった。

「あ、荒井？」

初めて見るその表情に、僕は慌ててしまった。

彼は手紙に視線を移し、おもむろに口を開いた。

「お前は……。」

「え？」

僕が聞き返すと、荒井は頭をゆっくり振った。

「やっぱり良い。」

そう言って荒井は自分の鞆に手紙を入れ、僕の方を全く見ずにピアノに向き合った。

激しいピアノの音に満ち溢れた音楽室は、何故か居心地が悪く、

まるで僕を拒絶するような背中を見ながら、そこを後にした。

第八楽章 〈impossible〉（後書き）

ご覧頂き有難うございました。

あと少しで完結できるかと思えます。

ご意見・ご感想を頂けると嬉しいです。

第九楽章 〈disappointing〉（前書き）

預かった手紙を荒井に渡した宏紀。

荒井は手紙の子と付き合ってしまうのだろうか。

第九章 〈disappointing〉

その日の夜、夢を見た。

真つ暗な世界に、仲睦まじそうに寄り添う二つの影。

荒井があの子の肩を抱き歩いている姿が見えた。

手を必死に伸ばして、必死に走って、彼の名前を呼ぶけど彼は振り向かない。

絶望と孤独感の中で、僕は走るのをやめ、腕を力なく下ろした。しとしと止めどなく降り注ぐのは、雨なのか、それとも、涙なのか。

「最悪だ……。」

明け方5時。起きるには早すぎる時間だ。

気分の悪い目覚めに、僕はごろりと寝返りを打った。

枕には泣いた跡がある。

昨日は色いろなことがあった。思い出したくないことばかりだ。

心がキリキリと痛む。

目頭が熱くなってきた。

「学校行きたくない。」

枕に顔を擦りつける。

夢の中のように、あの二人が寄り添う姿を見てしまったら、僕は普通にしていられるだろうか。

無理だよな、と自虐めいた笑いがでる。

それに……。

手紙を渡した時に見せた、荒井の表情も気になる。何か言いかけたことも……。

あれは一体なんだったのだろうか。

答えの出ないまま、僕は布団の中にもぐりこんだ。

僕の心配をよそに、午前中はいつも通りの生活が待っていた。ただ違うのは、僕が荒井を見れないこと。

どうしても目が合わせられない。

彼を好きになってしまったということが、僕に自責の念を与える。

男同士なのに。

今まで経験したことのない想いに、僕は完全に押し潰されていた。授業はろくに耳に入らないし、昼休みも僕の状態は相変わらず最悪だった。

荒井が教室を出たのを確認し、肩の力が抜ける。

しかし、胸の辺りにあるもやもやのせいで、ご飯もろくに喉を通らない。

仕方なく僕は早々に弁当の蓋を閉めた。

「宏紀、風邪か？」

西村が眉間にしわを寄せて僕の顔を覗き込む。

「え？違うよ。」

曖昧に笑って返すと、西村が僕の額に手を当てた。もう片方の手を自分の額に持っていく。

「熱は……ないかな？」

「大丈夫だから。」

と言っても西村も結城も聞いていない。

心配だからとりあえず保健室に行けと言われて、しぶしぶ立ち上がった。

本当は教室に居たほうが気が紛れるんだけど、二人に言われたら仕方がない。

薬だけもらってくる、と言って僕は教室を後にした。

心配性だなあ、と苦笑を洩らす。

でも、二人の気遣いが心地よかった。

保健室に行こうと階段を下りていると、見慣れた影が目映った。

荒井だ！

慌てて階段を上り、防火扉の裏に隠れる。

頼むからこっちに来ないでくれ！

足音と話し声が聞こえる。荒井の声ともう一つは女の子の声。嫌な予感がした。

緊張の中、二つの足音が階段を上に行くのを確認し、僕は恐る恐る階段へ視線を走らせた。

彼らはちょうど踊り場に居り、曲がった際に女の子の顔が見えた。やはり、手紙の女の子だった。

彼女はキラキラと荒井に笑いかけている。

そっか、荒井はあの子と……。

視界が霞む。

ゆっくり足を進める。

もう、どこに行ったら良いのかも分からなかった。

まるで今朝見た夢のようだ、と頭の片隅で思いながら僕は力無く足を動かす。

ふと気付くと上履きのまま校舎の裏側に来ていた。

僕は芝生の上に腰をおろした。

校舎に背を預け、ただ空を見上げる。

どんよりとした灰色の雲が校舎を覆っていた。

気づいた途端に終わる恋。あっけなく散る桜みたいだ。

もう、音楽室に行くこともないんだ。あそこは彼女の場所になる。

目頭が熱くなり、雫がこぼれた。

僕の頬に水玉がつたう。

ぼつぼつと制服に染みができる。

嗚咽が込み上げる。

僕は膝を抱え、肩を震わせた。

遠くでチャイムの音が鳴った。

どのくらいそうしていたのだろう。

灰色だった雲は真っ黒に変わり、今では雨が降っている。

雨で張り付いたシャツが冷たくて、僕は身震いをした。
さっきの鐘は、始まりのものなのか、終わりのものなのかすら分からなかった。

「とりあえず、戻らなきゃ……。」

まだ視界は霞むけれど。

校舎の壁に手について身体を支える。

すっかり冷えてしまった身体をさすりながら、僕は教室を目指した。

降り注ぐ雨は止む気配が無く、僕の髪からは雫が落ちる。

シャツも絞ったら水が出そうだ。

校庭はすっかりぬかるんでいて、上履きとズボンのすそに茶色い模様をつける。

こんなんで校内に入ったら、怒られるかな。

ハッキリしない意識の中でそんなことを考える。

校内に入り、教室を目指す。

授業中なのだろう、廊下には先生の声しか聞こえない。

階段を上り、自分の教室の後ろのドアに手を掛けた。

ドアにある小さな窓から、教室の中が見えた。

その窓際に荒井の横顔が見え、僕の心はまた痛みを覚えた。

いつも通りの風景。なのに、何故か違和感を感じる。

僕の心が普段とは違うからなのだろうか。

どうしようもない孤独感に襲われて、僕はドアから手を離れた。

第九章 〈disappointing〉（後書き）

ここまでお読み頂き、有難うございました。

次回で最終話です。

最後までお付き合いいただけたらと思います。

ご意見・ご感想頂けると、嬉しいです。

第十楽章 ｝ e n d ｝（前書き）

荒井と手紙の女の子が並んで歩いているところを見て、二人が付き合い始めたことを悟った宏紀。
ショックのあまり教室に戻ることも出来ず、雨の中家路についた。

第十楽章 ｝ e n d ｝

自宅につくと、家族はまだ帰っていないかった。

傘も差さずに帰ってきたため、玄関にはあつという間に水溜りが出来た。

濡れ鼠で、しかも泣きはらした目をしている僕。

こんな格好を家族に見られたら、何を言われるか分かったものではない。

誰も居ないことに安心を覚えた一方で、なぜか寂しさも覚えた。

「……お風呂、入らなきゃ。」

とりあえず冷えた身体を温めようと風呂に入ったが、思考はマイナスに働くばかりで、湯船につかりながらも気を抜くと涙が出そうになる。

じっとしていたといやな事ばかり考えてしまったため、早々に浴槽から出たせいか、風呂に入っても身体は冷たく、背筋を走る悪寒が止まらない。

「風邪でも引いたかな……。」

心なしに鼻声になっっているような気もする。

わしゃわしゃと髪をタオルで拭き、パジャマに腕を通した。

リビングにある薬箱の中からそれらしい物を探し、とりあえず飲む。

気休めくらいにはなるだろう。

羽毛布団でも引っ張り出して寝ようか、と考えているとインターホンが鳴った。

「誰だよ、こんなときに。」

勧誘だったら追い払ってやる、と思いながらカーディガンを羽織って廊下を進む。

「はい、おまたせ……。」

ドアを開けて目線を上に移すと、そこに居たのは荒井だった。

「な……っ！」

なんで居るんだ！

反射的にドアを閉めようとしたが、彼の手になんか阻まれる。僕が怯んだ隙に、荒井が無理やり玄関に入ってきた。

「あ、荒井！なんでこんなところに。」

荒井が後ろ手で鍵を掛けた。

ガチャリと言う音に身が竦む。

「これ。」

ついつと差し出されたのは、僕の鞆だった。学校に置いて帰ってきたのを、わざわざ届けてくれたようだ。

「あ、ありがとう。」

素直にお礼を言ったが、やはり目は合わせられなかった。

「山中……。」

そつと頬に触れた。親指が僕の頬をさする。そんな動作一つ一つに、僕は反応してしまう。

「お前、泣いた？」

ビクツと肩を震わせて、僕は一步後ずさった。

「泣いてないよ。」

明らかに嘘と分かるのに、口をついて出たのはそんな言葉。

荒井は何も返さない。沈黙が痛い。

それを破ったのは荒井だった。

「上がる。」

「え、ちょっと待って。」

僕の制止も虚しく、荒井はずんずんと廊下を進んでいく。

その背中が、昨日の音楽室での彼の背中に重なり、胸がずきんと疼く。

「ねえ……、荒井……。」

お願いだから困らせないで。これ以上泣かさないで。リビングに入った荒井がこちらを振り返った。

視線が交わり、僕は思わず目を逸らしてしまった。

「どうしたんだ、お前。」

荒井の視線がまっすぐ僕を射抜く。

どうしたもこうしたも無いだろうと、心の中では思っている口に出すことはできない。

僕が話そうとしないので、荒井はため息を吐いたようだった。

こっちにこい、と言うかのように手をとられ、されるがままに僕はリビングのソファアーに腰を下ろした。

三人掛けのソファアーの端と端に座った僕達の間、表現しがたい空気が漂っていた。

チラリと横を盗み見ると、荒井はまっすぐ前を向いて座り、膝の間で指を組んでいた。

「鞆は置きっぱなしだし、泣きはらした目はしてるし。……俺と目も合わない。」

何かしたか、と繋がられた言葉にドキツとする。

「荒井は、悪く、ない。」

膝の上で手を握り締めながら答えた。

「……気にしないで。」

好きな荒井の幸せを祝うことも出来ないわがままな僕がいけないことは分かっている。

こうなるのが嫌なら手紙を渡さないという選択肢もあったのに、それを選ばなかったのは自分なのだ。

だからこういう態度はしてはならない。

思ったそばから、視界が霞んできた。

「いや、俺が原因だ。」

決め付けたように言う荒井の声に、僕は思わず顔を上げた。上げた顔を、大きな手で包み込まれる。

この手であの子に触るんだ。

仕方の無いことなのに、視界がますます霞んできた。

荒井の顔の輪郭がぼやけてくる。

触れられている場所から熱が流れ、身体全体が熱くなってくよう
だ。

なんだか頭もくらくらししてきた。

風邪が原因なのか、荒井への想いの熱さなのか。

涙が一つこぼれた。

クリアになった視界で荒井と目が合う。

「荒井は……あの子と付き合ってるんでしょう？」

唐突に僕は聞いた。一日中、訊きたいが確かめることが恐かった
このことを。

彼の目に驚きの色が映る。

その色を見て、やっぱり、と心の中で呟いた。

「何の話？」

「今日、見たんだ。二人で階段上っていくところ。」

思い出すと胸が疼く。キラキラ笑った彼女の笑顔に、僕は勝てる
はずがない。

荒井の手が頬から離れた。

「あれは。」

「良かったね。」

荒井の言葉を遮って、僕は笑顔をつくった。

「可愛い子でよかったじゃん。昨日の今日だから、こんなに早く
付き合うとは思ってもみなくて、ちょっと驚いたけど。大事にして
あげないとね。」

捲くし立てるような僕の言葉に、荒井は呆然として聞いていた。

何かを言おうとしていたが、僕はそれを許さなかった。

自分でも不自然なのは分かっているけど、言葉を繋がないと堪え
きれなくなりそうで。

「音楽室にはもう。」

「それで泣いたのか。」

荒井が僕の手を掴んだ。その思わぬ強さに、顔が強張るのが分か
る。

「俺に彼女が出来た、って。」

「何言ってるの、違うよ。そんなわけ。」

「ないじゃん、と言おうとして失敗した。」

作り物の笑顔は壊れ、両目からは涙があふれてくる。

「山中……。」

荒井の優しい声がする。

そんな理由で泣いてたわけではないと言いたいのにな、声が出てこなかった。

みつともなく嗚咽を洩らし首を振っていると、荒井の腕が伸びてきて、僕を正面から包み込んだ。

荒井の心臓の音がする。

一瞬、涙が止まった。

「お前の誤解だ。」

耳元で彼の声がする。

「……ご、ごか、い？」

ぼろぼろ落ちる涙は荒井の服に吸い込まれていく。

「何が、誤解、なの？」

しゃくりあげながら訊くと、彼は少し笑ったようだった。

「あの子と付き合ってる。話しただけ。」

彼女なんていないという荒井の言葉に、僕は目を見開いた。

状況を掴めずにいると、荒井が身体を離し、僕の肩をつかんだ。

「お前の勘違いだよ。」

覗き込みながら、真摯な眼差しを向ける荒井の顔。

僕の勘違い……？

じゃあ、あの子の笑顔は？あれは何だったの？

「嘘ばっか……あの子笑ってたじゃん。だって……。」

少なくとも僕は、失恋した相手とあんなふうには話せない。

「彼女は俺のピアノが聞きたかったんだって。」

予期せぬ言葉に耳を疑った。

「俺が音楽室に入るところを見たらしい。付き合ってくれないな

ら、一度で良いから私のために弾いてくれないかって。そう言われて断れないだろ。」

「ピアノを……？」

「そ、すごく喜んでた。」

僕が見たのはその帰り道だったのかもしれない。

荒井は彼女を選ばなかった。あの子には悪いけど、それがとても嬉しくて、安心して、目頭がまた熱くなってきた。

両手で顔を覆い、胸が空になるくらい息を吐き出した。

「良かった……。」

「何が？」

小さく呟いたそれを聞きとがめられて、動転した僕の顔を大きな手が包み込み、ぐいつと顔を上げさせられた。

荒井の微笑と僕を呼ぶ声が耳に入った。

荒井の顔をまともに見れなくて、目を力いっぱいいつむっているとふにゅつと暖かいものが頬に触れた。

びっくりして目を開くと、荒井の優しい笑顔がそこにあった。

僕が最初に惹かれた、あの柔らかい笑顔。

「山中。……お前が好きだ。」

好きだと繰り返されて、僕は頭が真っ白になった。

荒井が、僕を、好き？

見上げた先には、まっすぐな瞳があった。それが嘘でも幻でもないことを教えてくれる。

「でも、僕、男だよ？」

「そうだな。」

「……いいの？」

「何が悪いんだ。」

そういった彼の顔は柔らかな笑みをまとうていて、僕は思わず荒井に抱きついた。

背中が腕が回される。

「男でも女でも、お前はお前だろ。」

彼の言葉が信じられないほど嬉しくて、僕の目にはまた涙が溜まってきた。

「荒井……僕、僕ね。」

ほとほと涙が落ちる。

「荒井が好きなんだ。」

背中に回された腕に力が入る。

「俺も……。」

少し照れた声に後押しされて、僕も腕に力を入れた。

いつの間にか、ずっと胸につつかえていた塊は無くなってしまった。

荒井から離れたくなくて、僕は頭を彼の胸に押し付けた。

「どうした？」

なんでもない、というように頭を軽く振った。

僕の頭を撫でる荒井の手が気持ちいい。

さっきまでの荒んだ気持ち嘘のようだ。

「また来いよ、音楽室。」

顔を上げると荒井と目が合った。

頬に手が添えられる。

「お前のために弾くからさ。」

僕は微笑んで、こくりと頷き、ゆっくりと目を閉じた。

〈END〉

第十楽章 ｝ e n d ｝（後書き）

ここまでご覧頂きありがとうございました。
なんとか、最後まで書くことが出来ました。
編集および番外編も書いていきたいと思いますので、よろしく願
いします。

『旋律を奏でて』はいかがだったでしょうか。
ご意見・ご感想、お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9733e/>

旋律を奏でて

2010年10月12日13時57分発行